

メディアアミックス時代の

評論はどこへ行くのか

川端 有子

二〇〇八年一月から十二月にかけて刊行された児童文学関係の研究書、評論は、大阪府立国際児童文学館の図書一覧によると、六〇七冊。もちろん、そのほかにも大なり小なり児童文学関係の活動は各地で、この年も行われて来たのであり、評者はそのすべてを眼にしたわけではないが、この一年、いくつかの印象的な動向があったことは感じており、紙数と個人の経験の限界はお許しいただいた上で、一般的な傾向と目だった研究を紹介していきたい。

まずは、国際児童文学館のリストであるが六〇七冊といっても、その中には展覧会の図録や目録、「*:*!大研究」など、研究書といえないものも含まれているし、再版や増補版もあるから、正味は半分というところか。この一覧を

見ていると、わかることがいくつもある。まず、この年は『赤毛のアン』の百周年だった。おかげで「アン」関係の本が目立っている。「シリーズ もっと知りたい名作の世界」(ミネルヴァ書房)は桂有子編著『赤毛のアン』を出している。このシリーズは、よく知られた名作をいろんな角度から分析した論文を集めたもので、『アン』についての新しい評論が読める。

『赤毛のアン』がここまで日本に愛読者を持つのは、最初の翻訳者、村岡花子の訳業が大きかったことは言うまでもないが、当人の孫にあたる村岡恵理の『アンのかご』(マガジンハウス)が出版され、訳者の生涯にも光が当てられた。これだけでも女学生文化のページを垣間見るような伝記であるが、この他には研究書と呼べるものは少なく、写真集や趣味の本に近いものが多い。

しかし面白い視点のものも出てきた。山本史郎著『東大の教室で読む赤毛のアン』(東京大学出版会)、茂木健一郎著『赤毛のアンに学ぶ幸福になる方法』(講談社)である。『アン』の翻訳もある山本氏の本は、東大で文学を教える方法を易しく解説したもので、取り上げられているのは『アン』だけでなく、いわゆる英米文学の古典も挙がっている。評者が大学生のころ、『アン』を卒論のテーマに選ぶなど許される雰囲気ではなかったが、この点に限り、世の中は「よくなった」といいたい。